

真実の愛

同刻、アテナは神殿の廊下をひたすら駆けていた。廊下の先でミイラがファラオを担いで角を曲がるのを見ると、アテナは駆ける速度を増した。

アテナが廊下の角を曲がると、赤茶色の岩肌が形作る天然のドームが現れた。アテナが見上げると^{まぼゆ}眩い日光が天井の小さな穴から差し込み、石畳の向こうの一段上がった^{さいだん}祭壇にいるイルヴァーナとファラオに注がれていた。

「よくぞ、いらっしゃいました。歓迎いたしますよ。」

イルヴァーナは両手を広げて微笑んだ。

「なにを、貴様・・・」

「ホホホ、軍隊なんぞ連れてこなくても貴方を傷つけはしなかったのに、だって愛しているのですから。」

「なら呪いを解いてくれるか？」

「ええ、あなたがずっとここで私と暮らすのなら、ね。」

「断れば？」

「あはははは、何もしませんわ。共に^{よみ}黄泉の国へ参りましょう。私は元々^{よみ}黄泉の国から呼ばれてきたのですもの。」

「いったい誰に・・・」

「そんなことより、如何^{いか}なさいますの？」

「それは・・・」

ファラオが腰に隠したナイフを抜いた。それをイルヴァーナの頭部の蛇の一匹が眼を細めて見つけ、イルヴァーナに告げ口した。

「あっ、こいつ、攻撃する気だよ！」

イルヴァーナは、ファラオのナイフを持つ手を掴み、顔を近づけた。

「これがご回答なら・・・」

イルヴァーナは、ナイフをファラオの喉^{のど}に向けて押し返した。

「魂にならなければ・・・真実の愛が見えぬのなら・・・」

イルヴァーナの目から涙が零れ落ちた。

「心配しないで。すぐに一緒にになりますわ。」

「だめよ！」

イルヴァーナがファラオの剣を彼の喉^{のど}に突き立てようとした時、アテナが二人の前に飛び出した。

「やめて、本当の貴女は決してそんなことはしないわ……。だって、あなたは命を賭して彼を救ったのですもの。」

「ア、アテナイの姫、それはどういう・・・？」

ファラオが喘^{あえ}ぎながら問うた。

「小娘は、下がっておれ・・・」

「いいえ・・・。本当の自分を取り戻して、アシェンドラ！」

アテナは、彼女の腕に手を添えて告げた。

「だまれ、だまれ！私は・・・」

イルヴァーナの目が泳ぎ、ファラオの手を離した。

「君は、アシェンドラなのか？」

ファラオが逃げようとするイルヴァーナの肩を掴み振り向かせた。

「あ、あああ・・・」

イルヴァーナは顔を手で覆い、呻きながら^{うめ} 跪^{ひざまず} いた。ファラオは彼女と共に座り込み、彼女の手を取り、じっと^{ひとみ} 瞳を見詰めた。

「君の美しい白銀の髪は見ることは出来ないが、その愛^{いと}おしい灰色の^{ひとみ} 瞳は変わらぬまだまだ。」

ファラオは彼女の額を^な撫で、^{くし}櫛で髪をとかす様に頭部の蛇達を指で払い、首に手を添え、唇を引き寄せた。

すると、どうだろう。神殿に差し込んでいた太陽の光よりも^{まばゆ} 眩い光がイルヴァーナとファラオを包み、彼女は元の姿に戻り、捕らわれていた蛇の王の子供たちは地を^は這って逃げ出した。^{きら} 煌めく長い銀色の髪が彼女の腰まで流れ落ち、灰色の^{ひとみ} 瞳からは^{あふ} 涙が溢れ落ちた。

「生きていてくれたのか・・・」

ファラオの顔からクマは消え、顔にも生氣が戻っていた。

「いいえ。」

アシェンドラは首を横に振った。

「私の命は呪いで引き止められていただけです。それに、私はこの神殿でしか体を保てないのです……。呪いが解けた今、間もなく黄泉の国へと引き戻されるでしょう。」

「そんな、せっかく会えたというのに……」

ファラオの言葉にアシェンドラが首を横に振った。

「今一度会え、別れを言えることに感謝しましょう。」

「あの、ごめんなさい。その……、私の呪いは解けますか？」

アテナが声を落として、二人の間に割って入った。

「そうでした。貴女には本当に申し訳ないことをしました。また、感謝もしなければなりません。彼と、私を救ってくれたことを……」

「じゃあ……」

「でも、残念ですが私の呪いが解けて、魔力も消えてしまったようです。」

「そんな……、じゃあ私の呪いは解けない？」

アシェンドラは^{うなづ}頷いて答えた。

「私たちと同じく真実の愛でのみ解かれるでしょう。貴女に愛する人は？」

「それはファラオ様・・・」

「いいえ、それは貴女がそうしなければならないと思い込んでいるだけです。他に思
い人はいないのですか？」

アテナは言葉に詰まり ^{うつむ} 俯いた。

「アシェンドラ、君を呪った者でも彼女の呪いは解けぬのか？いや、そもそも君を呪
った者は誰なのだ・・・」

ファラオが疑問を ^{てい} 呈した時、ロイが ^{さいだん} 祭壇のある広間の入り口に辿り着いた。

「アテナ！」

「ロイ、ああ、無事だったのね！」

アテナとロイが駆け寄り、その様子をファラオとアシェンドラが腕を組んで微笑んで
見守った。

「どいつもこいつもしくじりおって・・・」

ロイの背後から男が近づいてきた。男は手を天に向かって振り上げると、ロイの足元
を炎の輪が取り囲み、炎は立ち上がって大蛇の形を成すと彼の体を締めあげた。

「ぐあああ！」

ロイは熱さと腕とあばらを締め付けられ、骨が割れる痛みで絶叫した。

「^{じゃまもの}邪魔者は先に消えてもらうぞ、セト！」

ロイの後ろからアメンホテプが現れた。

「アメンホテプ？！お前、何をしている？」

ファラオは状況が飲み込めず、彼に問うた。

「この者が貴方の命を狙い、私を呪った黒幕です。」

アシェンドラが前に進み出て、アメンホテプを睨^{にら}みつけた。

「アペプ、貴様だったのか・・・」

ロイの顔を黒い霧が再び覆^{おお}い、セトの面が変わると言った。

「やあ、我が宿敵セトよ。同じ炎の属性を持つお前は私とは相性が悪いからな・・・

先に宿主^{やどぬし}ごと消えてもらおうぞ。その後は、ファラオを消し、私が現世を支配するのだ！」

アメンホテプが拳を握ると、炎の蛇の締め付けが強くなり、ロイのあばらが折れ肺に

突き刺さると、血が口から泡となって噴き出した。

「どうだ！貴様の治癒の力も間に合うまい！」

「やめてー！」

アテナが駆けだし、手を伸ばすが、ロイまでまだ10mは届かない。

「ラーのおじいちゃん！今すぐ、呪いの加護を解いて！」

「しかし、そんなことしたらもう戻れぬぞ。二度と人間には・・・」

ラーが、アテナのフードから顔を覗かせて言った。

「早く！」

「ええい、ままよ！」

ラーの掛け声とともに、アテナは白蛇に変わり、ロイを飛び越えアメンホテプの前に着地すると彼に巻き付き、締めあげた。

「彼を放して！」

アテナはアメンホテプを力いっぱい締めあげた。

「うぬ、おのれ・・・」

「放しなさい！」

パキッというアメンホテプの腕が折れる音がしても、アテナは締め付けを緩めず、更に彼を締め上げた。

「ぐあああ・・・、クソッ。し、仕方あるまい・・・」

炎の蛇はロイを放し、アメンホテプの体へと戻って消えた。アテナはアメンホテプから離れて、ロイの元に近づいた。彼は気を失って、倒れている。

ファラオは剣を手にアメンホテプに切りかかるが、彼が作り出した炎の障壁^{しょうへき}に弾き飛ばされ床に叩きつけられた。

アメンホテプは、ファラオの剣を拾い上げると、笑みを浮かべて歩み寄った。アシェンドラがファラオの前で両手を広げて彼の前に立ちはだかると、ラーが彼女の前に舞い降り、老人の姿になると手を前にかざした。すると、ラーの手から突風が放たれ、

アメンホテプはたまらず膝を折った。

「おのれ、ラー！」

「もうよさぬか、アペプよ。世界を統べるなど、なんの意味も持たぬことがまだ分かってぬか。欲望ではなく、責務こそが世界を救うのだ。」

「黙れ！全てを手にしたお前に何が分かる！この世界は、私の物だ。私が手に入れるのだ！」

アメンホテプはそう叫ぶと、体に闇の炎を纏^{まと}い、八つの頭を持つ大蛇の姿に変化した。

「ラーよ、鳥なんぞの姿でこの俺に勝てるのか？本来の姿では話すのがもう精いっぱいなんだろう？」

八頭の大蛇となったアペプは、口から炎を吐き、広間一面を焼き払った。ラーはスズメの姿に戻ると舞い上がり、アシェンドラはファラオを、アテナは蜷^{とぐろ}局を巻いてロイを炎から身を挺^{てい}して守った。

「アテナ・・・ありがとう。」

ロイが胸を押さえながら立ち上がった。彼の手から青い癒^{いや}しの光が輝いていた。

『やってくれたな・・・。覚悟しろよ、アペプ！』

ジャッカルの方がロイを覆い、セトはラーの剣と盾を構えた。

「ほざけ！1000年前の決着、ここで付けてやるわ。」

アペプはそう告げると、セトに向かって炎を吐きかけた。セトは盾で炎を防ぎ、^{ふところ}懐

に入り込もうと踏み込むが、別の頭から再び炎が吐かれ、後退を^{よぎ}余儀なくされた。

「ハハハハ！無駄なことよ！」

セトはアペプの尾を飛び越え、身をひるがえしながら炎を避け、背後に回り込むも、

アペプの別の頭がクルリと後ろを向いて炎を吐いた。

『アペプ、その人間を置いて黄泉の世界に帰れ。』

セトが飛び下がりながら告げた。

「ハハハハ、その言葉そっくりそのまま返してやる・・・」

『警告はしたぞ』

セトがアペプが吐き出した炎を高速で飛び越え、蛇の頭を切りつけた。攻撃を受けた

頭は眼球を切り裂かれ叫び声を上げるが、直ぐに別の頭から炎が吐かれ、セトはラー

の盾の陰に潜み、それを凌いだ。

「効かぬわっ！」

アペプの叫びに、セトはラーの盾から顔を覗かせ、再び剣を握りしめた。彼は、アペ

プの周りをぐるぐると回り始めると、蛇の頭から次々と炎が吐かれ、辺りは火の海と

化した。そして、セトは立ち上がる^{こくえん}黒煙の中に姿を消した。

「おのれ、こしゃくな！」

アペプは尾で一带を払い、火を消してセトを探した。

『上だ、バカヤロウ！』

アペプの頭上に飛び上がっていたセトは、落下しながらアペプの背中に剣を突き立てた。

「ギャッ！」

アペプがもんどりを打った。

「どうした、そんなものか？」

「おのれ・・・」

アペプの頭の一つがクルリと背後のアテナの方へ振り返った。その直後、真っ赤な炎がアテナに降り注ぎ、彼女の体を包み込んだ。

「いかんっ！」

セトは、アテナの元へ回り込み、癒しの光で炎に包まれた彼女の体を癒した。

「はははは！もろとも死ねい！」

アペプの全ての頭から炎が吐きだされ、セトに滝の様に注がれた。

セトはその炎を背中に受けながらも、アテナの癒しの手を解かなかった。彼女の火傷は消えていくも、ぐったりと横たわったまま、目を覚まさない。

セトの手が震え始める。

「おのれ・・・、せつたいに・・・」

『ゆるさんぞおおおお！』

セトとロイの声が共鳴し、彼とアテナを青い炎が包み込み、アペプの炎を掻き消した。

「な、なんだその青い炎は・・・」

アペプがたじろいだ。

『絶対に、貴様はゆるさん！』

セトの面から、ロイとセトが言い放った。

「うぬぬ、こしゃくな！死ねい！」

アペプが再び炎を吐くが、ロイを包んだ青い炎を突き通すことが出来ない。

「無駄だ、アペプ。俺達の怒りの炎が、お前の炎の温度を超えている・・・」

「だまれ！」

アペプの口が裂けるほどに開き、炎の量が更に増した。

ロイはアペプの炎を受けながら平然と剣を鞘に納め、ゆっくりと膝を折った。彼は地を蹴ると、アペプの炎を切り裂きながら彼の顔前まで瞬時に飛び上がった。

ロイは腰の上で拳を固めて力を貯めると、アペプの顔面を全力で殴りつけた。

アペプの頭部は白目を剥いて、ダラリと地に向かって落ちていった。

ロイは、そのままに裏拳で2頭目を、蹴り返して3頭目を立て続けに打ち倒すと、地に降り立った。

ロイに噛みつこうと、アペプの牙がすかさず襲い掛かってきた。

『容赦はしない・・・』

ロイは両手を組んで襲い掛かる蛇の頭を叩き伏せると、倒れた蛇の背中を駆けあがって、アペプの胴体を目指した。2つの頭が彼を飲み込もうと襲い掛かるも、ロイは手を交差させて腰から剣と金槌を抜くと、彼らを同時に払った。

残った2頭のアペプは驚愕して顔を合わせると、ロイの追撃の目の前でふと姿を消した。

ロイが空中から地に目をやると、人の姿に戻ったアペプが鬼の形相でこちらを見上げている。ロイは地に降り立つと、アペプに向き直った。

『覚悟はいいか・・・？』

「貴様ら如きが・・・、生意気な口をきくなああ！」

アペプの錫杖が光の槍に変化すると、ロイに襲い掛かった。ロイはハンマー1つでその攻撃を弾いていった。

「なぜだ?! こんなはずが・・・あるわけがない！」

アペプの見開いた目が、恐怖に染まっていく。

ロイは剣を納めると、アペプの突きを避け、ままだに槍の柄を掴むと、自身に引き寄せた。躓^{つまづ}きながら引き寄せられたアペプの顎をロイのハンマーが掬い上げ、彼は大の字にひっくり返った。

「そこまでだ、よくやったロイ・・・」

セトの声が戻ってきた。

「黄泉にかえるがいい、アペプ・・・」

セトは奪い取った光の槍を肩に担ぐと、アペプに向かって投げつけた。

「ち、ちくしょおお・・・」

アペプは両手を前に突きだしてそれを防ごうとするも、光の槍は彼の体を貫いた後、
錫杖に戻り、その傍らに転がり落ちた。

「人間の方は殺してはおらぬ。処分はそちらに任せる。」

セトはファラオに背を向けたまま告げ、黒い霧の面は姿を消した。ファラオは呆然と
彼らを見返すばかりだった。

「アテナ！」

ロイは、アテナの体を抱え上げ、その身に引き寄せた。彼女の鱗は冷たく、その目は
閉じられたままだった。

「ああ・・・」

ロイはその体を強く抱きしめ、涙した。

「ろ、ロイ、くるしい・・・」

「アテナ!？」

ロイは抱きしめた手を緩めると、彼女の顔を見詰めた。彼女の大きな目は彼を見返す
も、身を隠すようにスルリとロイに背を向けた。

「ありがとう・・・でも、こんな姿・・・、もうあなたには見せられない。」

アテナは涙を流すと、地を這^はい去ろうとした。

「待ってくれ！君と別れるのはこれで2度目だ・・・。もう、君を失いたくない。」

ロイは駆け寄り、頭をもたげたアテナを後ろから抱きしめた。

「君は永遠^{とわ}に僕の心に・・・愛している。」

ロイは、アテナの頭に手を添^そえて自分の方に向かせると、鼻の頭にキスをした。

「共に生きよう・・・」

「この姿で貴方の隣にいてもいいの？」

「もちろんだとも。」

アテナはロイの肩に首を乗せて、二人は抱き合った。すると、アテナの白い鱗^{うろこ}が金色^{こんじき}

に輝きだし、ガラスが弾ける音と共に、眩^{まぼゆ}い光が辺りを包み、光の雫が流星のように

祭壇^{さいだん}の広場に降り注いだ。

アテナは元の姿に戻り、ロイと見つめあうと、口づけを交わした。

「ブラボー！」

ラーは舞い降り、スズメの姿から老人の姿になると、手を叩き祝福^{しゅくふく}した。

「よもや、今日^{こんにち}、2つも奇跡が起ころうとは！」

ラーは、ファラオとアシェンドラ、そしてアテナとロイを交互に見て告げた。

「神々の世界でも最も尊きものじゃ。ファラオよ、よくぞ己を克服^{こくふく}し、愛する者の姿を見通した。お主にはこれを授^{さづ}けよう。」

ラーは、金色の手鏡をファラオに与えた。

「アシェンドラは黄泉^{よみ}の世界に戻らねばならぬ。黄泉^{よみ}の世界では、現世の時間などあつという間じゃ。アシェンドラはお主がここで生を全うするのを待つのは、こちらの世界では一月程に過ぎぬ。じゃが、お主は寂しかろう。その鏡で彼女を呼べばいつでも彼女を映すことが出来よう。」

ラーがファラオに微笑んで見せた。

「感謝いたします。」

ファラオはラーに跪^{ひざまず}き、涙した。アシェンドラは彼に寄り添い、抱擁した。

「さて、アテナよ。よくぞ真実の愛を授^{さづ}かり、己の心に気付いたな。これからどうするつもりじゃ？」

「彼と暮らせれば、それで十分です。」

「あい、分かった。ならば其方^{そなた}の子らに神の祝福^{しゅくふく}を与えよう。病にも負けぬ、元気な子を授かるであろう・・・」

『俺も役目を果たし、ロイとの契約も完了だ。そろそろ帰ってもいいだろう？』

セトが語った。

「そうじゃな。アシェンドラ、準備はよいか？」

「はい。」

アシェンドラはファラオにキスをして、彼の涙を拭き、立ち上がった。

ラーがパチンと両手を叩き、腕を広げると、祭壇^{さいだん}に光のゲートが現れた。

ジョニーも祭壇^{さいだん}の広場に追いつき、蛇の王は息子達と再会を果たした。ケセムが兄たちと首を絡めあ^{から}って抱擁^{ほうよう}した。

セトは本来の神の姿でロイの体から抜け出し、ゲートへと歩み出した。

黒く長い髪は彼の腰まで延び、彼の広い背中を覆い隠している。

「死んだらまた会おう。友よ・・・」

セトは背を向けたまま立ち止り、片手を上げてロイに別れを告げると、その顔を見せることなく光のゲートへと姿を消した。アシェンドラはファラオと抱き合い、長い間手を取り合うも、セトの後を追ってこの世を去った。

ラーは、光のゲートを閉じてスズメの姿に戻ると、アテナの肩へと降り立った。

ジョニーと蛇の王とその子供たちに囲まれて、アテナはロイと抱き合うと、皆で此度の勝利を称えあった。

女神アテナ

ファラオは王都へ凱旋^{がいせん}し、自らの即位式を盛大に開くも、隣には妃^{きさき}の姿はなかった。

ファラオが錫杖を天に掲げると、雲は晴れ、水の引いたナイル川の畔に麦が芽吹いた。彼の後ろで見守るように、ラーは微笑み佇んでいた。

ファラオが観衆に称えられながら宮内の玉座に戻ってくると、アテナとロイがそこで待っていた。

「やあ、よく来たな。我が友人たちよ。」

アテナとロイはファラオに跪いた。

「よせ、さあ、立ってくれ。呼び立てたのは他でもない。ロイよ、君が望むなら我が側近に迎えたいのだが・・・」

ロイはアテナを一度見て、ファラオに向き直った。

「望みをお聞きいただけるのであれば・・・、彼女の国で彫刻家を目指したいと考えております。」

「そうか、残念だな。して、其方^{そなた}の事だが・・・」

「はい。」

アテナが前に進み出た。

「・・・彼と祖国に帰りなさい。」

「でも、それでは我が国との同盟は・・・」

「このまま同盟は継続する。この書簡^{しょかん}を王に渡すがよい・・・。ただし、条件がある。」

受け取ろうとしたアテナからファラオが書簡^{しょかん}を取りあげた。

「其方が望む者と婚約^{こんやく}させること。なれば、エジプトは我が命が続き、そちらから攻めてこぬ限り、攻め入る事はせぬ。よく、兄に言い聞かせよ。」

ファラオはアテナに微笑んで、書簡^{しょかん}を彼女に手渡した。

「あの・・・」

「なんだ？」

アテナの言葉にファラオが答えた。

「彼は、アメンホテプは、どうなったのですか？」

「ああ・・・、奴は宦官となり、生涯、金鉱で、我が国の為に尽くすことになるだろう。」

ロイとアテナは手をつなぎ、ファラオの即位を祝う祭りで親方と兄弟子達と再会した。

「おかえり、ロイ。」

親方がロイの肩に手を添えた。

「あの、親方・・・、俺・・・」

うつむ 俯くロイを親方がじっと見つめた。

「行くんだな、彼女の国へ。」

親方は眉を下げて告げ、兄弟子たちは驚き顔を合わせた。

「ごめん、親方。彼女と共に生きたい。それに、彼女の国で新しい彫刻を学びたいんだ・・・」

「人生は一度きり。自分のやりたいように進みな。俺たちの事は気にしなくていい。」

「親方さん！」

アテナは親方に抱きつき、親方はロイとアテナの肩を引き寄せて抱きしめた。

「がんばれよ。でも、たまには仕事を手伝いに来い。」

親方は高らかに笑い、二人は彼の胸元で微笑んだ。

ロイはその後、アテナ像を彫り続け、公園、神殿、城、様々な場所に飾られ、ギリシアで有名な彫刻家として名を馳^はせた。

また、ロイが彫った女神像は海の守護神として船首に飾られるようになり、アテナは自慢の夫と腕を組み、そのエジプト行きの船へと足を踏み入れた。

ロイは、エジプトの兄弟子達を率いて、アシェンドラ妃の巨大な彫像を彼女の墓に建造し、その像はファラオとエジプトを見守り続け、両国の友好の象徴として平和をも

たらしめました。

おわり